

みんなで使おう学校図書館!

学校図書館支援便り

市立図書館司書と支援担当の学校司書が
学校図書館支援を行っています



ブクン(やべみつのりさん画)

令和元年 11月5日
東村山市立中央図書館
学校図書館支援担当

読書週間 10/27~11/9 今年の標語は「おかえり、葉の場所で待ってるよ」

第65回学校読書調査 大人の働きかけ 量に影響

毎日新聞社と全国学校図書館協議会が実施した「学校読書調査」の結果が発表された。今年は子どもの読書と大人との関係性を調査の柱の一つとして、「家の人と読んだ本のお話をする」、「学校で先生や司書に本をすすめられる」子どもが読書量が多くなる傾向が見られた。東大の秋田喜代美教授は、大人が読書する姿を見せたり、本を手に取りやすい環境を整えることも効果的と指摘する。

読書量や不読率はほぼ横ばいだが、スマホなどの端末に時間を多く使っている状況も浮き彫りとなった。



「POPで伝える本の魅力」 内田剛さん講演報告

9月10日、学校図書館担当者連絡会と学校司書研修が合同で行われました。今回は、三省堂書店より、本屋大賞の仕掛け人でもある内田剛さんを講師に迎え、POPで伝える本の魅力についてお話いただきました。

内田さんは、大人だけでなく、小中高校でもPOP作りの授業をされています。ある学校では、10年に渡って毎年、太宰治の『走れメロス』でPOP制作をしているそうですが、ひとつとして同じものはできないとのこと。作品のどこを伝えたいか、どうやって表現しようか、それぞれの生徒がその作品に向き合ういい動機づけにもなっているようです。

本を介したコミュニケーションの方法として、最近はピブリオバトルも人気ですが、POP作りは人前に出ることが苦手な人でも個性を発揮して取り組むことができ、より幅広い人に勧められる方法だとか。POPコンテストも行われていますので、図書委員会などで取り組んでみてはいかがでしょうか？

学校図書館専任司書向けの研修では、作り方のノウハウを教えてください、それぞれPOPを作って、講評していただきました。とびだすセリフや、めくるしかけなど、目を引く工夫がこらされていました。



絵本で読む“多様性”

発達障害や、LGBTQ など多様な子どもたちの理解を助けてくれる絵本がたくさん出ています。ぜひ手に取ってみてくださいね。

→『なまけてなんかよい!』は字を読むのに困難のあるディスレクシアの男の子のおはなし。すごく頑張っているのにできない辛さがわかります。

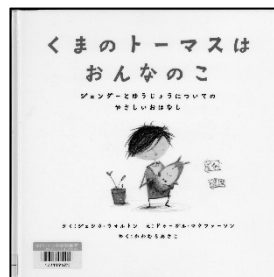
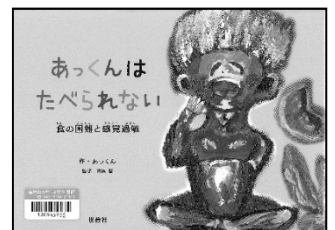
(品川裕香/作 北原明日香/絵 岩崎書店)



←『ボクはじっとできない』ではADHDの主人公が、特性を自分で理解し、対処法を考え出します。困っている子と付き合うヒントにもなりそうです。(バーバラ・エシャム/文 マイク&カール・ゴードン

/絵 品川裕香/訳 岩崎書店)

→『あっくんはたべられない 食の困難と感覚過敏』(あっくん/作 高橋智/監修 世音社)は、東村山七中出身の当事者が食べられない辛さを描いた絵本。発達障害に伴う感覚過敏の研究者による解説も役立ちます。



←『くまのトーマスはおんなのこ』(ウォルトン/作 マクアーツ/絵 かわむらあさこ/訳 ポット出版)は、トランスジェンダーの子どもが自分をわかってもらおうと友だちに打ち明けます。受け入れるということの大切さが伝わります。